



開拓の群像 中

GCS

2



211

790082

磯谷運上屋

一八五一年、福山城修築費として百兩を献金した柴右衛門は、六四年、松前藩主崇広たかひろが海陸軍総奉行に任せられたとき三百兩、さらに長州征伐の進発に際し四百兩を献金した。六九年六月、隠居いづえして伊三右衛門いざえもんと改名し、養子幾太郎いくたろうに柴右衛門を名のらせて家督を譲

かれが七十歳でこの世を去ったのは一八九五年、にしんの漁期が近い三月一日のことである。

日高のこんぶ礁／山田文右衛門

車を使って
物資輸送

といわれている。

一八〇〇年代のはじめ、栖原角兵衛が請け負った留萌場所の支配人となり、その後、独立して請負人となった〇七年、この地方の交通が不便なことを憂い、同場所アフンから山越えしてニセバルマ、エタベツを経て石狩川いしかりの中流オシラリカまでの六キロ余の山道を開削し、オシラリカか

山田家も代文右衛門を襲名し、場所請負人として活躍した。祖先は明らかでないが、一七八八年、幕府からえぞ地へ巡見使が派遣されたときには、通詞（通訳）をつとめ、巡見使とアイヌの間にたつて、意思の疎通をはかった。

ら舟で石狩や、千歳に連絡するようにした。

一八二一年に勇払場所を請け負った十五代文右衛門は、翌二二年に沙流場所を、ついで三二年に厚岸場所を請け負い、場所内のアイヌを、石狩やオタルナイあるいは根室などに出稼ぎさせて新しい漁場を開いた。三九年より四四年までは根室場所の請負人にもなつて、資産をふやした。また、勇払場所内の千歳には牛や馬を飼養し、千歳から美々までの道路を改修して車を常備のうえ、貨物運送に当たった。えぞ地で物資の輸送に車を使つたのは、かれがはじめてといわれている。

樺太場所も

経営

この文右衛門を父として、一八一五年、福山城下唐津町に生まれた十六代めは、父のあとを継いで勇払・沙流・厚岸・根室の四場所を請け負い、一八五五年、幕府がえぞ地を直轄すると、その方針を忠実に守り、千歳に米三百俵を備えて非常の用に当てた。かれの行為をたたえた箱館奉行では苗字の使用を許した。五四年における文右衛門請負場所の内容として、つぎの記録が残されている。

勇払場所 いわし・さけ・しかの皮・うぐい・いりこを産す、運上金二百五十両、会所二軒、勤番

所一軒、通行屋二軒、蔵二十六棟、牛十九頭、馬百九頭、船かかり場六か所、渡船場二か所
沙流場所 たら・いわし・こんぶ・いりこ・しかの皮を産す。運上金二百両、会所一軒、通行

屋一軒、蔵十四棟

厚岸場所 こまい・いわしのしめかすや油・こんぶを産す。運上金六百両、会所一軒、勤番所



山田文右衛門/16代め

一軒、番屋一軒、台場一か所、蔵七十六棟、馬八十八頭、船八十六隻

また、当時アイヌの賃金は一日三十五文から百二十文、米一キロを上等とし、中等、下等、女の大人、子供に分けていた。

南下するロシア勢力にそなえて、北えぞ地（カラフト）の開拓をもくろんだ幕府は、松川弁之助を差配人（のち差配人元締）に任じてその経営をまかせた。このとき文右衛門も

願ひ出て差配人並を命ぜられた。かれは一八五八年、私費をもって人や資材を送りこみ、カラフト東海岸サカエハマ、サツサツ、シユマヤその他数か所に番屋や倉庫を建てて漁場を開き、にしん・さけ・ますの漁業に力を注いだ。

しかしカラフトは経営場所が遠く、かつ不便であつたため、投資額が大きい割りに実収がともなわず、さすがの松川も差配人元締を辞退して場所の経営を返上した。この結果、伊達林右衛門・栖原角兵衛が松川に代わつて共同経営に乗り出したが、文右衛門だけは少しも弱音をあげず、六四年の期限までがん張り通した。

十日にわたって、白老から、勇払・新冠まで、十メートル前後ほどの深さの海中に二万七千個を投入した。ところどころに浮木をつけて目標とし、一年過ぎてから、検査したところ、石が砂中にかくれて数個重なりあっているとところには、良質のこんぶが発生していた。こんぶ増殖に自信をえた文右衛門は、分散投石を集中投石に改め、六六年、六七年の二か年間に石積み船を七隻にして、総数七万個を投入した。このため、六五年に三十トンであったコンブの生産は六六年になると倍近くの五十七トンに達した。文右衛門は、このうち五駄を箱館奉行に送ったところ、奉行小出秀実はこのほかよろこんで、これを江戸幕府に献上した。

こうして文右衛門の沙流場所は一躍こんぶの生産地として名をあげ、その生産額も六七年には八十四トン、六八年には百五十トンを超えた。投石作業はさらに継続され、六八年、なお七万個の投石がおこなわれた。かれの投石したところは沙流川河口の東方、スマートエウシ付近で、いまでも門別浜から当時の石を検出することができる。一八六六年、隠退した文右衛門は漁業を分家の富右衛門に、こんぶ増殖事業を子の文治につがせ、八三年九月十二日、勇払郡勇払村で没した。行年六十九歳であった。



日高でのこんぶ採り

投石して
こんぶ増殖

文右衛門の功績の大きなものに、こんぶ礁の築設がある。

石狩場所の海中で、偶然にも投げ棄てられた陶器の破片に、こんぶが根づいているのを発見した文右衛門は、一八六〇年、沙流の海浜に百個ほどの岩石を投入してみた。これが、投石のはじまりである。こんぶがついているのを見て意を強くした文右衛門は、六三年から本格的なこんぶ礁づくりに専念した。

文右衛門は、箱館から石工十二人を招き、石工一人にアイヌ三人を配して付近の山から石を切り出し、これを長さ四十五センチから六十センチ、幅三十センチから四十七センチほどに仕上げ、五隻の船を使用し、九